学 位 論 文 内 容 の 要 旨

		要　　旨
学位申請者	糟谷　里美 【比較社会文化学専攻　平成２１年度生】	本研究は、戦後日本バレエの発展に寄与したとされるバレエ振付演出家小牧正英の再評価を試みることを目的としている。 まず、従来の小牧に対する評価は、戦後上海から帰国した戦後の小牧の活動のみに基づくものであったことを指摘、その上で小牧の日本バレエへの寄与は小牧が居留したハルビン及び上海における小牧の活動とそこで培われた芸術活動の視座を明らかにすることが不可欠であるとしている。そして、舞踊家小牧の出発点となったハルビン音楽バレエ学校での学びと上海バレエ・ルッスでの活躍等に関する当時の現地新聞記事や公演プログラム等を収集、また、戦後の新聞雑誌記事、小牧執筆による著作や寄稿文等を入手し、豊富な一次資料を用いて戦前、戦後の活動を丹念に辿っている。その結果、小牧の日本バレエの発展への貢献の源は、ディアギレフの「バレエ・ルッス」の本格的導入にあると考察している。戦前の日本ではバレエ・ルッスのオリエンタリズム等の芸術的特質の受容や部分的特質の舞台化に止まっているのに対し、小牧は自らの体験から得た「民族の超越」「民族への回帰」を活動の根源に置き、演目の選出、劇場、資金の調達、ダンサーの技術向上等、バレエ・ルッスを多面的に導入しながら「民族を超越」する古典バレエを上演すると共に、バレエ・ルッスの思想を反映しつつ日本人である小牧の「民族への回帰」が打ち出されたバレエ作品の創作へと歩みを進めていると考察している。 本研究では、小牧はバレエ・ルッスを日本の風土に馴染ませながら多面的に導入することによって複眼的にバレエ開拓を進め、バレエの定着に力を尽くし、日本バレエを発展に導いた点に、日本バレエのパイオニアとしての小牧を再評価できると結論づけている。
論 文 題 目	バレエ振付演出家　小牧正英（1911-2006）研究 ―バレエ・ルッスの日本への導入をめぐって―	
審 査 委 員	（主査）　教　授　　柴　　眞理子	
	教　授　　秋　山　光　文	
	教　授　　猪　崎　弥　生	
	准教授　　神　田　由　築	
	准教授　　水　村　真由美	